

回覧

生活応援・地域復興 第21号

1995.11.14 救援ニュース

都市生活現地救援本部
西宮市津門西口町7-3
電話：0798-36-6679

ちょっと早いけど

もちつき大会

西宮市の西宮浜仮設住宅(400戸)において、11月19日(日)昼前(詳しい時刻は未定)からもちつき大会が行われます。企画をしたのはふれあいセンターの運営にかかわる西宮市職員有志の会

19日西宮浜仮設住宅

「元気会」と西宮の組合員渡辺圭子さんです。

当日は仮設交流会でおなじみのKTH共同事業所から鉢

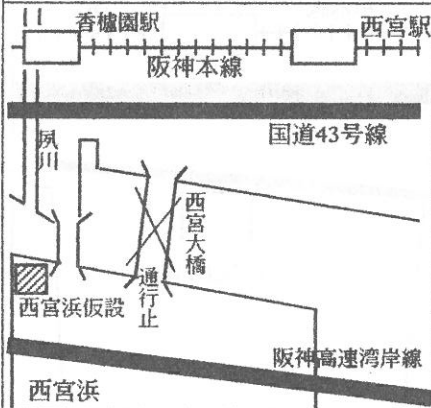
植えの花が届けられま

す。

現在、現地救援本部ではもちのつき手ととり手を募集しています。我こそはと思わん方は救援本部まで名乗りを上げて下さい。

連絡先

都市生活現地救援本部
TEL 0798-36-6679



ふれあいセンターの風景

～芦屋浜中央公園仮設住宅～

30階近い高層アパートが林立し、巨大なチューブのような阪神高速湾岸線が沖を走っている。夜になってそれらに明かりが灯ると、まるで一昔前の未来都市のイメージ画を見ているような気がしてくる。

1969年から開発が始まった芦屋浜。125ヘクタールを埋め立てた造成地に、震災直前には一

戸建てを含め5千3百世帯、1万7千人が住んでいた。

突如として今春からこの芦屋浜に2千戸の新住民が暮らし始めることになった。市内全戸の内、53%が全半壊と認定された芦屋市では、約2千9百戸の仮

♡現地救援本部♡ INFORMATION

◆仮設交流会◆

11月24日(金)
尼崎市昭和公園仮設

11月26日(日)
尼崎市橋公園仮設
ふれあいセンター

11月27日(月)
西宮市大谷町仮設

◆ふれあいセンター開所式◆

11月19日(日)
神戸市中央区
ポートアイランド
第2仮設住宅

設住宅のおよそ3分の2にあたる2千戸(うち3百戸程は小・中・高校のグラウンド内!)が芦屋浜に建っている。

この「人工の浜」のほぼ中央部に緑に囲まれた区域がある。車道から見ると公園のようにみえるが、目を凝らすと木立を通してプレハブがぎっしり建っているのがわかる。これが芦屋中央公園仮設である。公園と野球場だった場所に384戸の仮設住宅がたち並んでいる。

中央公園仮設には「幸運」なことに「ふれあいセンター」が建った。ふれあいセンターは全ての仮設住宅内に建てられているわけではなく、一定の要件を満たした所にだけしか存在しない(裏面へ続く)

シーサイドタウンに2千戸の仮設住宅

(表面から続く) い。センターがあるところにボランティアの支援も集中する。逆は逆である。これは仮設住民の目には立派な「差別」と映るであろう。

ともあれ中央公園仮設は幸運であった。ふれあいセンターでは住民集会やおけいこ事が活発に行われ、いろいろなボランティアも集まってくるのだろう。その証拠に、センター内の壁にはイベントなどのチラシやポスターがあちこちに貼られている。人もひんぱんに出入りする。

11月3日に現地救援本部は山形の米沢生協から託されたパステル画を携えて中央公園仮設のふれあいセンターを訪問した。このふれあいセンターのボランティアの一人、鮫島加奈子さんから声がかかったからである。

鮫島さんは神戸市東灘区に住む都市生活生協の組合員である。自宅は半壊状態で、建て替えの話が持ち上がっているそうだが、カラリと明るく朗らかである。実際、建て替えとなれば大変なことになるだろうが、今はぐずぐず考えても仕方がない、と笑っていた。

鮫島さんに、ボランティアに参加したきっかけは、とたずねると、「なにも御大層な志が

あったわけではありません、偶然のようなものです」という答えが返ってきた。「友人に誘われるまま、サクラのつもりで中央公園仮設にやって来て、自治会長さんとその周辺の人々の人柄と行動力に引き込まれてし

サクラのつもりが.....

まったんです」と鮫島さんは屈託がない。

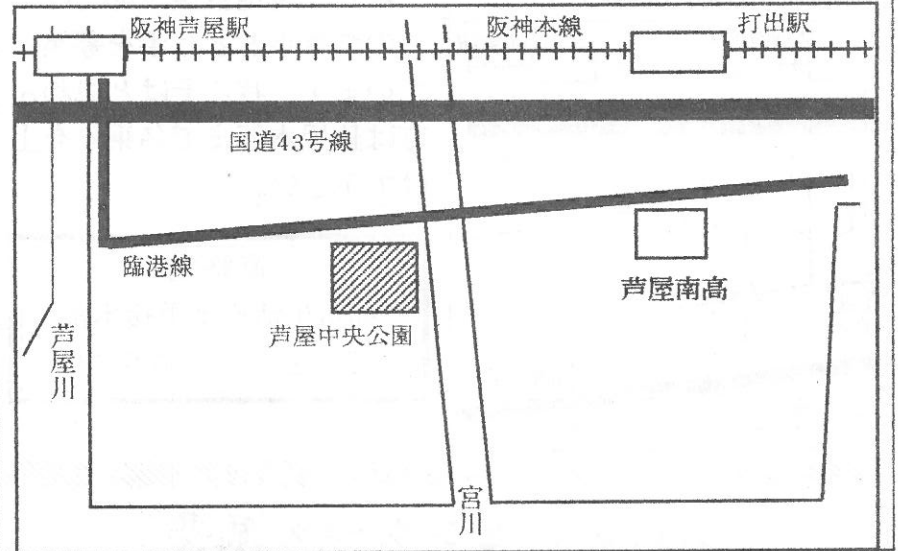
私たちがふれあいセンターを訪れた時、会議室では近隣地区の仮設自治会長さん3名が何かの打ち合わせをしていた。そのうちの一人に、60年配の(間違っていたらごめんなさい)、180センチはあろうかと思われ

るスラリと長身の、笑顔の優しいロマンズグレーの紳士がいた。この人物が鮫島さんの言葉の中に出てくる中央公園野球場自治会長の小林洋一郎さんであった。

残念ながら小林さんは忙しそうで、私たちは挨拶程度の言葉を交わしただけだったが、この人は鮫島さんの話では文武両道をこなす人生の達人だそうで、困難の中でも笑顔を絶やさないその姿を見ていると確かに魅力ある人物であることが私たちにも感じられた。

帰りの車中で高層住宅群を眺めながら、置いてきたあのパステル画は次に訪ねたとき、どここの部屋の壁に掛かっているだろうかとはんやり考えていた。

(現地救援本部 池田)



私の提言

東神戸支部の組合員春木さんの提言 被災で学ぶ「大切な食べ物」(11/9朝日新聞震災版より)



兵庫女子短大助教授

春木 敏

大震災から十カ月を数えようとしています。マ
ーケットは何事もなかったかのように豊かな秋の
実りを山積みし、買い物客でにぎわいます。街の
風景をみる間もなく忙しく日常生活を送る私たち
に震災はすでに過去の出来事なのではないでしょうか。
決して忘れてはならないことの一つに、大切な
食べ物があります。ごちそうさんまいのお正月
明けに一転、今日の命をつなぐ食べ物がない、
という環境のなかに放り出されたのです。激震地
区にいた私はあの日、水も熱源もない中で食パン
とリンゴをかじりながら、家庭内非常食の必要性
に思いをさせていました。
。毎日の食事を大切に！を合言葉に栄養教育
に携わる私にとって、震災は天と地をひっくり返
しました。なぜなら、豊かな食品に囲まれた現
在、肥満・高脂血症など過剰栄養を主因とする成
人病対策が健康づくり施策の柱です。
一夜明けた避難所で、ながい行列を作っても
らった食糧は小さなスティックパン一つ。一瞬、
目を疑いました。非常時に備えての食糧備蓄は？
人も行政も口々に言います。「こんなに大きな
地震がくるとは……」
三日目以降は各地からの救援食品が手際よく配
給されていきましたが、一人に一割の牛乳パック
であったり、スナック菓子の袋であったりもえら
ま。すぐに食べられるものを大量に……もらえ
るものは何でも……おにぎりや生鮮食品、賞味
期限切れの食品が多く捨てられました。飽食日本
ならではの光景でした。何がどれだけ必要か、現
地と周辺救援隊のネットワークとマニュアルが必
要です。
被災後の時間経過と共に食の欲求は変化しま
す。それにこたえることが生きる力の源となりま
す。真冬の被災地に温かい炊き出しは最高のごち
そうでした。ボランティアの好意に甘えるばかり
でなく、共に料理をして元気をだしましょう。
私たちの命の糧土を耕して育てる作物を、命あ
る作物を無駄なく活用できる調理技術を持ちま
しょう。いつでも買えるとは限りません。家族のため
に二、三分の非常食を保管しましょう。生産から
流通をふまえた栄養管理こそ、平常・非常時を通し
ての有効な栄養と食糧対策であると考えます。